



## 足尾銅山の木造社宅

前々回(2月20日号)に続けて足尾銅山です。今回は、社宅の話です。

足尾は渡良瀬川の谷筋に沿った山奥の町。鉱山で働く人々には社宅が必須です。その結果、谷筋に社宅が建つことになり、現在も社宅やその跡がたくさん残っています。

上ノ平という地区があります。一段高い丘の上、日当たりも良い場所です。そこには管理監督者の社宅が集まっています。住宅の面積も広く、小さな社宅でも二戸一。多くは一戸建てです。今も住民がおられます。



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



谷から上ノ平に上がる分岐点に下ノ平地区があります。こちらは一般従業員向けの社宅跡が残っています。四戸一の木造長屋。間取りはすべて田の字型。入口とそれに直結する台所、他に四畳半くらいの部屋が3室です。風呂、トイレは共用。トイレは四戸一の建物の傍に独立しています。風呂の所在は確認できませんでした。他地区とも共用の風呂があったのでしょう。居間の窓外は、各家の玄関に向かう通路。そこを通る人と声を掛け合ったことだと思います。

坂を上り下りしているときに、ふと思いました。上位者が上に、下位者が下に。組織図がそのまま社宅の配置に！ 職員・工員の身分が分かれていた時代の社宅。身分の違いが空間に示されています。もっとも、ひとつの社宅では、会社での立場が同じだから気楽。家計の状況も似たようなものだし、屋外の共同トイレを使うわけですから、生理現象もお



▲足尾銅山の一般従業員向け木造社宅

互いがわかる。取り繕っても通用しない世界です。プライバシーを保とうとしてもできないが故のオープンな空間。会社での立場が同じ者同士、暮らしやすいかもしれません。

足尾では、大きな住宅は作れません。小規模な社宅群が狭い平地に分散して配置されています。その一つひとつに、企業と組織階級の異なる人々が暮らす。従業員同士で処遇の比較をしにくいでしょうし、嫉妬心も生まれにくそうです。

耐震性に問題がある木造社宅は、各地で取り壊しが進んでいます。『あゝ野麦峠』(1979年製作の日本映画。原作は山本茂実のノンフィクション『あゝ野麦峠』)のロケに使われた木造寮はすべて撤去。富岡製糸所の寮は外観を見ることしかできません。木造社宅を見ておくことも大事かもしれません。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)